

## シベリア抑留の4年間

木村孝一郎 鹿沼市

鹿沼の板荷出身。18歳だったか、学校が終わって東京に出た。東京におばさんがいたのでそこで世話になり、おじさんの友人が勤めていた東京駅近くの中央郵便局を紹介されて就職した。

今はアメリカ大使館になっているが、麻布に満鉄（注1）の支社があった。当時、ワイシャツがほしい1円20銭か、30銭で買えた時代で、郵便局でもらう給料は45円だった。そんなとき、満鉄の支社が出したポスターを見たのだった。その頃、満鉄は大東亜共栄圏として中国に線路をどんどん拡大していたため、人員が不足していたのだ。「若人よ、大陸へ」などと書いてある。給料は170円くれるという。それを見て私も満州へ行こう、満鉄に入ろうと思っただけだったのだ。

### ●大陸へ

合格した者が東京駅に集まって神戸へ向かい、そこから船に乗って中国の大連まで行った。船の名は、たしか「こうわん丸」だったと思う。全国から集まって100人くらいいたかもしれない。大連に着くとそれぞれが行先を仕分けされ、私はチチハル（齊齊哈爾）に行くことになった。

チチハルでは、「君はまだ若いから、ハルピン（哈爾濱）の鉄道学院に行きなさい」と言われたので、ハルピン鉄道学院自動車運転科に入った。満州は広いので鉄道網はまだまだ密でなく、やはり自動車だという。自動車の免許証を取るように言われた。昭和17年の4月だった。

ハルピンはきれいな町だった。以前ロシアが入っていたから、ロシア風のしつかりした建物も多い。ハルピンには松花江という大きな川があり、冬には凍って凄く厚さになる。そうするとトラックでもなんでも走れるりっぱな道路になる。

宿舎もりっぱだった。しかし舎監というのがいて厳しく、外出などはできなかった。学校には2年弱いて、卒業してチチハルに戻った。

20歳になって徴兵のため身体検査を受けたら甲種合格になり、1年間軍隊（関東軍）にいた。ロシアは戦車が多いので速射砲の部隊に配属された。モンゴルに近いハイラルという町で、ノモンハン事件の時、ソ連の戦車が入ってきて日本の戦車と戦った所だ。当時のソ連の戦車などはすごかった。日本の戦車は小さくて弱く、結局日本が負けた。

一時、満州に日本の軍隊が相当数集まったことがある。だから、これはソ連と戦闘になると予想されたが、そうはならず、関東軍〇〇大

演習と、演習ということになって終わった。

### ●終戦を迎えたが

昭和20年8月15日、終戦。天皇陛下の玉音放送があるからと、全員並ばされてラジオを聞いた。ああ、とうとう日本は負けちゃったと思っていたら、奉天に集合せよという命令が私たちに来た。

奉天に行くには何千キロもある。日本のトラックがあつちこつちに放り出してあるので、その中からエンジンのかかるのを見つけて奉天に向かった。42、43人いたろうか、満杯だった。

奉天に日本の医科大学があり、そこが集結場所になっていたが、そこまで行く道がろくにないので、このトラック、線路に合わせられないかと誰かが言い出した。タイヤのゴムをとってレールに乗せたらうまくはまって、それでずいぶん効率よく走れてありがたかった。しかし、もうすぐ蒙古、ハイラルから10キロほどのノモンハンに近い白狼（ハクロウ）に差し掛かった時にとっても困った。白狼という町はすべてが城壁に囲まれた小さな町だったが、日本が負けたという事になったら、ソ連が代わって入ってきたのだ。ソ連の戦車がずらーっと並んでいるのを見た。これでは町を通れない。片側は大きな山脈があるし、ソ連軍が攻撃してくるし、そこを迂回するために仕方なく沼の中をこねて、やつとの思いで奉天にたどり着いたのだった。ひど

い目に遭った。

### ●糧秣倉庫に移動

奉天にたどり着いたのは8月の末だった。到着したものの、大学の宿舎がもう満杯で私たちのいる場所がなく、好きなどころに行きなさいという。

仲間に、関東軍の糧秣倉庫があるからそこへ行こうという者がいた。そこには食糧でもなんでもあるというので行ってみたら、本当にすごい、なんでもあった。洋服もあれば、缶詰もあり、お米も山のようにあった。そこへテントを張って42、43人がそこに住んだが、食べ物不自由しなかった。

しかし、そこに食糧があるのを知って、現地の中国人が盗みに来た。鎌や槍みたいのを持って何百人も来た。屋根はないが、アンペラ（植物で編んだもののようなもの）を食糧に何枚も重ねて雨が降ってもぬれないようにしていた。この二階建てのように大きく積まれた食糧の山が一晩で盗まれてしまった。こっちも食べ物もなくなってしまうから、没収されずに持っていた機関銃で追っ払った。それでも逃げずに盗もうとするのには驚いた。彼らも食べ物には困っていたのだ。

### ●シベリア鉄道で中央アジアへ

約1か月ぐらいそこにいたろうか。9月の末ごろになってソ連の軍隊がやって来て、あんな

たちは3日後にロシアのカザフスタンという所に行く、と言った。ソ連に連れて行かれるだろうことは予想していた。

全員トラック3台くらいに乗せられて奉天の駅に行き、そこから黒竜江という大きな川の近くまで列車で行った。川には筏のような船が浮いていて、それを向こう岸から引つ張って渡った。向こう岸はソ連領で、ブラゴヴェシチェンスクといった。そこから貨車に乗せられ、いよいよシベリア鉄道を西に向かって走り出した。しかし、あつちで停まり、こつちで停まり。満州にあつたいろいろなものを貨車に積んでロシア国内にどんどん運んでいたから、我々の貨車はその貨車が通るたびにわきよけて停まっていたのだ。ところで、バイカル湖のほとりを走ったのだが、この細長い湖の短い方の辺を朝から夕方まで一日中走ってもまだ湖が見えるという、この湖の大きさには驚いた。

そしてやっと1か月かかって着いたのが中央アジアのカザフスタン、カラガンダという町だった。

ソ連は労働力がなくて、日本の捕虜を森林での伐採や炭鉱での石炭掘りなどの使役に使った。医科大学に集まった人たちもみんな連れていかれた。女たちも抑留されたという。全体では日本人55万人がソ連に抑留されたという（注2）。

### ●製材所で働く

カラガンダはモスクワまでまだ3000キロあるが、その先はヨーロッパだ。日本のように土はなく、地表30センチくらいの砂の下はみな石炭。石炭の露天掘りで、機関車が大きな穴に下りていって石炭を積んで上がってくるような、すごい規模だった。

収容所では仕分けされて、私は製材所勤務になった。われわれ42人の組もずっと一緒だった。機械は休ませず24時間3交代で動かす。昼間だけはわれわれ日本人が担当で、製材所で丸太を引いて、隣の木工所で家具などを作れという。日本の貨車より大きい60トンの貨車で丸太を運んでくる。三人で抱えるような太い木を板にするが、それをやれという。そんなことを言われても、だれも木工所に勤めた経験などはない。できない、と言ったが、「あなたたちは文明国で育った人たちなんだから、わからないわけはない、やってくれ」という。どうでもやるしかないのである。のこぎりの歯が何本もあり、1本の本を機械で引くと何枚かの板になって出てきたが、みな飴みたいに曲がっていた。木工所にもっていくと、こんな使い物にならないと使えるところを取って残りは薪にした。そうやって約1か月、毎日使い物にならないものばかり作っていた。ところがロシア人の監督は文句ひとつ言わない。これはなかなか日本人には

まねのできないことだ。この時ばかりでなく、ずつと一言も文句を言わなかった。

1 か月を過ぎると、だんだん慣れてきて、のこぎりの目立てなどもみんな自分たちで覚えた。だんだん素晴らしい仕上がりになってきた。1日に何本までこなせというノルマがあったが、ロシアの夜と朝の2組は、私たちがあまりにもやりすぎだ、もう少し控えてくれ、と要求してきたほどにまで熟練してきたのだった。

### ●市民の優しさ

2年の終わりがごろだったと思うが、製材所で給料をくれるということになった。ほんの小遣い程度だったが、少しでももらえるとということ、タバコも買えるしパンも買える。それで交替で町にパンを買いに行った。私も何回も行った。市民には配給の券があるが、われわれは抑留者だからそんなものはない。それでもパンを求める長い列に並ぶ。すると、前のほうに並んでいる人が「おーい、ヤポンスキー（日本人）、ヤポンスキー」と私を呼ぶ。それで前のほうに行つて列に入れてもらう。そうするとまた呼ぶ人がいて2回くらい、前のほうに行くことになる。そのことを並んでいるだれも怒らない。「あなたら、大変だなあ」と言ってくれる。「お父さんやお母さんが心配してるだろう」と連中はまず言う。パンを売っている人は、配給券をくれ、と手を出す、「そんなものないよ」とい

うしかない。抑留者だというのはすぐわかる。券はなくても、みんなと同じにちゃんと測つて包丁で切つてくれた。

学校で子どもたちに鉛筆がない。たまたま背囊（リュックサックのようなもの）の中に鉛筆が何本か入っていたので、半分に折つて本数を増やし、それで何回か大きなパンと取り換えた。喜んでもらえた。

製材所の監督もうるさいことは何にも言わないし、ロシアの一般国民は、捕虜になつていくことを知っているから、優しく親切にしてくれた。日本に帰る日、貨車まで住民が見送りに大勢来てくれた。「お父さん、お母さん、心配しているに違いない、よかつたね、よかつたね」「よかつたね、ヤポンスキー」と言つて涙を流す人もいた。

朝は黒パン100g。それと岩塩で味付けしたおつゆが飯ごうに三分の一くらい。その中はキャベツの葉っぱがポコポコと浮いてるだけ。それで終わり。昼も同じくらい。夜は150gのパン。小麦粉をふるつた残りのふすまをお湯でべつとり練つたものもあった。

肉や魚はほとんどない。夜、ほんのたまに肉が出る。なにかと思つたら犬。そして砂漠にいっぱい亀がいたので、たまにこれを取つてきて食べた。亀も結構うまかつた。

### ●冬の暮らし

收容所では、私はいちばん若い方だったが、召集された年配の人は気の毒だった。ばたばた倒れた。冬に亡くなると、零下50度近いので凍つて地面が掘れず、大変だった。石炭はいくらでもあつたから石炭で燃やして、掘つてそこをまた石炭で燃やして、何回か掘つて埋葬した。石炭はいっぱいあるのでどんどん焚いた。冬は羊の、毛がくつついてるまんま、内側を毛にした服を着せられた。ズボンもそうだから、重くて冬は大変だった。水は凍つてしまうため、どこへ行つても水がない。だから長靴はフェルトである。

便所には大きいバールが置いてある。それで凍つて高く積み上がった排泄物を折り崩す。ズボンのぼたんは手がかじかんではずれ、あれには困つた。

ずつと製材所だったが、よそに行かされないでよかつたと思う。後で他の抑留者の話を聞いて比較してみると、どちらかというと我々はまだ恵まれていたと思う。

### ●帰国に向けて

3年が過ぎて4年目に入るころ、急に私たちはコルホーズ（集団農場）に行けと言われた。コルホーズでは食事が全然違う。鶏だ、牛だ、牛乳だ、なんでもある。自由にくれるわけではないが、もらいに行くと、「いいよ、もつていけ」と言つて、卵などもいっぱいくれた。ある

程度栄養を付けてから帰そうという事なんだろう。

ここには、ポーランドの女たちが大勢きていた。強制的に連れてこられたと言っていた。私がいた収容所には日本のほか、ドイツ、ポーランドからの捕虜がいた。

シベリアから貨車で太い丸太が何両も来るから「日本の連中は疲れて大変だ、俺たちが代わってやってやるから、お前ら休め」、そんなことを言ってくれたことがあったりして、日本とドイツの捕虜はなかなかうまくいったのだった。

3 か月農場にいたが、仕事はろくにない。「今日はみんなで落穂拾いしてくれ」と、そんな程度。毎日ろくに仕事もしないで、食べたり飲んだりして、みんな体が太ってきた。そしてついに、国に帰りなさいということになった。

いったん最初にいた収容所へ戻って、それからシベリア鉄道に乗せられた。毎日、朝から晩まで走り通し。食事と、途中で機関車に水の補給をする以外に停まらず、走りっぱなし。さすがに乗っているのがいやになる。貨車で、わら布団にみんな寝転がっていた。

ちょうど20日かかってナホトカで下車。また身体検査。日本語が書いてあるものは一切取りあげられた。免許証も何もみんな取られてしまつて、まったく何も無い。港といつても建物

ひとつなく、コンクリートの岸壁があるだけの港だった。迎えに来ていた1万トの船は何という名前だったか、日本の船だった。恐ろしいほどの急勾配の梯子で乗船した。そして、すぐDTを体中にかげられた。

ナホトカから一昼夜かけて京都の舞鶴に着いた。下船すると一列に並んで銭湯に連れられた。風呂から上がると出口は違う場所、新しい白いシャツとズボンが置いてある。持ち物はタオル1本さえない。お金をもらい、電車に乗って、鹿沼に帰ってきた。

### ●とうとう帰ってきた

鹿沼の実家に帰ってきたところ、「お前、生きてたのか！」と驚かれた。通知が来て死んだことになっていたのであった。

日本に帰ってきて、死なないですんだ、という気持ちだった。もう、けつして日本には帰れないと思っていたから。ここで俺たちの一生が終わるのか、とみんなそう思っていた。あの頃のことを考えると生きて帰ってこられただけ、我々は幸せだった。

あまり楽しい経験ではないから、今まで他人に話したことはない。死ぬか、生きるかの瀬戸際を生きてきたから、今こうして長生きしてるのかなあ、と思う。



終戦から65年過ぎた平成22年、銀杯、書状とともに25万円を国からもらった

### 注1…満鉄（南満州鉄道株式会社）

かつて満州国に存在した日本の特殊会社。一九〇六年（明治39年）から一九四五年（昭和20年）まで存在した。鉄道事業を中心として広範囲にわたる事業を展開し、日本軍による満洲経営の中核となった。

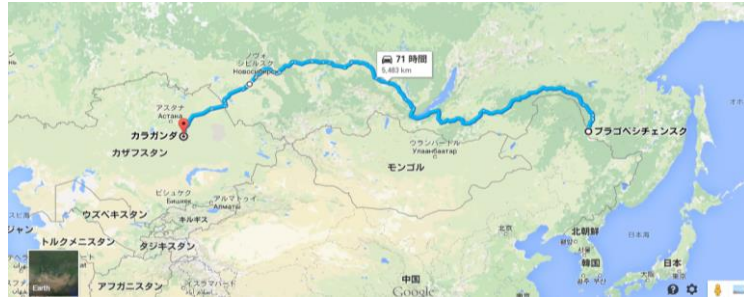
### 注2…シベリア抑留

終戦後、武装解除され投降した日本軍捕虜らが、ソ連によっておもにシベリアに労働力として移送隔離され、長期にわたる抑留生活と奴隷的強制労働により多数の人的被害を生じたことに対する日本側の呼称。

一般的には「シベリア抑留」という言葉が定着しているが、実際には現在でいうモンゴルや中央アジア、北朝鮮、カフカス地方、バルト三国など、ソ連の勢力圏全域や中華人民共和国に送り込まれていた。

厳寒環境下で満足な食事や休養も与えられず、苛烈な労働を強要させられたことにより、多くの抑留者が死亡した。このソ連の行為は、武装解除した日本兵の家庭への復帰を保証したポツダム宣言に背くものであった。ロシアのエリツィン大統領は一九九三年10月に訪日した際、「非人間的な行為に対して謝罪の意を表す」と表明した。

多くの強制収容所があったシベリア地方は、ユーラシア大陸中央部に位置し、冬季に内陸部では最低気温がマイナス50℃に達することもある。このような過酷な環境下で、森林伐採やバム鉄道（第2シベリア鉄道）建設などの重労働を強いられ、劣悪な居住環境と



不十分な医療、特に強制抑留の初期の貧弱な食糧事情などにより、強制抑留期間を通じて約6万人もの方が死亡したとされているが、正確な犠牲者数はいまだに判明していない。(ウイキペディアより)